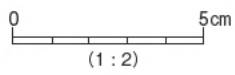
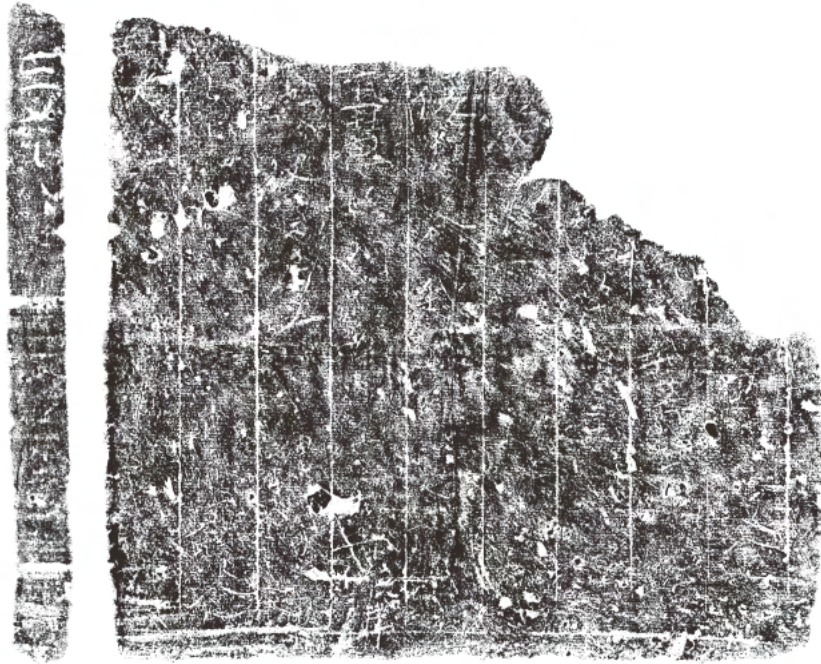
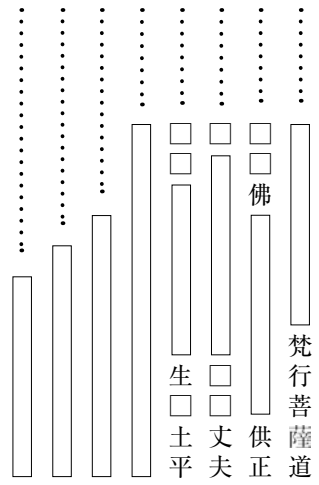


第12図 復原個体L





第13図 復原個体M



この内容を大正大藏経をもとに校合を行った結果、法華経卷三の「授記品第六」に含まれる部分と考えられた。これにより裏面がオモテ面となり、丁付が残る小口はオモテ面の左辺にあたと推測できる。経文の配置案を以下に示す。

1	掌瞻仰尊顔目不暫捨即共同聲而說偈言	11	哀愍我等故	16	而賜佛音聲
2	大雄猛世尊 諸釋之法王	12	如以甘露灑	17	除熱得清涼
3	若知我深心 見爲授記者	13	心猶懷疑懼	18	未敢即便食
4	如從饑國來 忽遇大王饍	14	我等亦如是	19	每惟小乘過
5	若復得王教 然後乃敢食	15	雖聞佛音聲	20	言我等作佛
6	不知當云何 得佛無上慧		若蒙佛授記		爾乃快安樂
7	心尚懷憂懼 如未敢便食		願賜我等記		如飢須教食
8	大雄猛世尊 常欲安世間				
9	爾時世尊知諸大弟子心之所念告諸比丘				

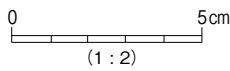
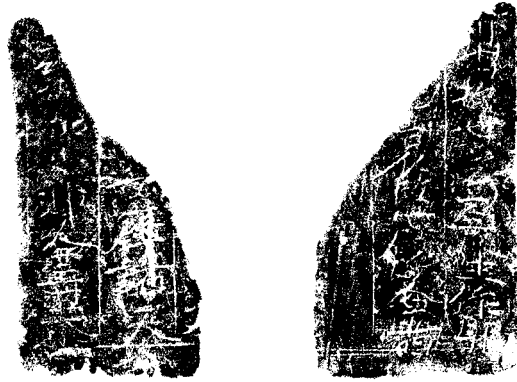
1	是須菩提於當來世奉觀三百萬億那由他	11	佛供養恭敬尊重讚歎常修梵行具菩薩道
2	於最後身得成爲佛號曰名相如來應供正	12	遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫
3	天人師佛世尊劫名有寶國名寶生其土平	13	正頗梨爲地寶樹莊嚴無諸丘坑沙礫荆棘
4	便利之穢寶華覆地周遍清淨其土人民皆	14	處寶臺珍妙樓閣聲聞弟子無量無邊算數
5	譬喻所不能知諸菩薩衆無數千萬億那由	15	
6		16	
7		17	
8		18	
9		19	

オモテ面は、一行目と九行目を除き偈文で構成されるため、一行を一七字と二〇字で想定した。文字の判読がかなり困難であり、特にウラ面では字数すら把握できない部分が多かったため、あくまでも配置案は仮の措置としておきたい。また、罫線の幅はオモテ面で一九〜二一mm、ウラ面で一九〜二四mmを測る。ウラ面の一行目と九行目はやや幅が広がっていたが、袖側匡郭線は視認できなかった。上記の配置案が正しければ、当個体は卷三の七枚目ないし八枚目に該当するとみられる。

(二四) 復原個体N (第14図)

破片テを含む個体。拓本のひとつには、「泉涌寺南谷出土 丹羽氏蔵」の注記が施されている。拓本を見る限り、片袖側と地側の小口を有しているらしい。かなり細く浅い刻字であるためその判読が困難だが、まずはその内容を示す。





第15図 復原個体O

1 1 耨多羅三藐三菩提而諸佛法不現在前如是  
 2 2 一小劫乃至十小劫結加趺坐身心不動而諸  
 3 3 佛法猶不在前爾時切利諸天先爲彼佛  
 4 4 於菩提樹下敷師子座高一由旬佛於此座  
 5 5 當得阿耨多羅三藐三菩提適坐此座時諸  
 6 6 梵天王雨衆天華面百由旬香風時來吹去  
 7 7 萎華更雨新者如是不絕滿十小劫供養於  
 8 8 佛乃至滅度常雨此華四王諸天爲供養佛  
 9 9 常擊天鼓其餘諸天作伎樂滿十小劫至  
 10 10 于滅度亦復如是諸比丘大通智勝佛過十

オモテ面はほぼ偈文に該当し、一行を一七字と二〇字で想定した。ウラ面は經典本文にあたるが、二行目までが一八字、三行目は一六字と乱れている。判読結果ともあいまって、配字の計画性が弱まっていたと見受けられる。

罫線は両面ともに認められ、幅はオモテ面で一七mmから二〇mm、ウラ面では二〇mmから二三mmを測る。かつ、地側の匡郭線も両面で確認できるが、匡郭線外側の余白は、ウラ面に比べてオモテ面が極端に狭くなっている。当復原案に基づいた場合、個体Nの枚次は法華経卷三の一二枚目ないし一三枚目に相当する。

(二五) 復原個体O (第15図)

小片ながらも片袖と地に小口を有する、破片トを含む個体である。その内容は以下のように判読できた。

《X面》

..... □ 出於世 □ <sup>(衆)</sup> 生作眼  
 ..... □ 哀愍 □ 者  
 (空白)

《Y面》

..... □ 諸天  
 ..... □ 人非人等 □

これをもとに大正大藏経と校合したところ、法華経卷三の「化城喻品第七」の内容に符合した。その結果、X面がオモテ面となり、破片トはちやうど粘土板の冒頭と末尾に相当する部分を有していたことがわかる。以下にその配置案を示す。

- |   |                   |       |       |       |
|---|-------------------|-------|-------|-------|
| 1 | 三惡道充滿             | 諸天衆減少 | 今佛出於世 | 爲衆生作眼 |
| 2 | 世間所歸趣             | 救護於一切 | 爲衆生之父 | 哀愍饒益者 |
| 3 | 我等宿福慶             | 今得值世尊 |       |       |
| 4 | 爾時諸梵天王偈讚佛已各作是言唯願世 |       |       |       |
| 5 | 尊哀愍一切轉於法輪度衆生時諸梵天  |       |       |       |
| 6 | 王一心同聲而說偈言         |       |       |       |
| 7 | 大聖轉法輪             | 顯示諸法相 | 度苦惱衆生 | 令得大歡喜 |
| 8 | 衆生聞此法             | 得道若生天 | 諸惡道減少 | 忍善者增益 |

- |    |                   |       |       |       |  |  |  |  |  |
|----|-------------------|-------|-------|-------|--|--|--|--|--|
| 9  | 爾時大通智勝如來默然許之又諸比丘南 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 10 | 方五百萬億國土諸大梵王各自見宮殿光 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 1  | 明照耀昔所未有歡喜踊躍生希有心即各 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 2  | 相詣共議此事以何因緣我等宮殿有此光 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 3  | 曜時彼衆中有一大梵天王名曰妙法爲諸 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 4  | 梵衆而說偈言            |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 5  | 我等諸宮殿             | 光明甚威曜 | 此非無因緣 | 是相宜求之 |  |  |  |  |  |
| 6  | 過於百千劫             | 未曾見是相 | 爲大德天生 | 爲佛出世間 |  |  |  |  |  |
| 7  | 爾時五百萬億諸梵天王與宮殿俱各以衣 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 8  | 袂盛諸天華共詣北方推尋是相見大通智 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 9  | 勝如來處于道場菩提樹下坐師子座諸天 |       |       |       |  |  |  |  |  |
| 10 | 龍王乾闥婆緊那羅摩睺羅伽人非人等恭 |       |       |       |  |  |  |  |  |

偈を含むため一七字と二〇字詰が混在する。拓本のオモテ面三行目に空白が確認できることから、冒頭に載る五字一句の偈は一行四句分で配字され、偈の結句で改行されていたとわかる。両面ともに一〇行で配置されたようだ。復原案が正しければ、当個体の枚次は一七枚目ないし一八枚目に該当する。なお、罫線と地側匡郭線を両面にもち、罫線の幅はオモテ面で一九mm、ウラ面で二〇mmを測る。

(二六) 復原個体P・P' (第16・17図、写真1)

この二個体は、結論から述べると、破片ナを含む個体Pを、破片ニを含む個体P'が補完するという関係にあった。破片ニは山根瓦経として実物が現存しており、片面のみに文字が線刻されている。



3 生千萬億種皆生疑惑佛說是經於八千劫  
 4 未曾休廢說此經已即入靜室住於禪定八  
 5 萬四千劫是時十六菩薩沙彌知佛入室寂  
 6 然禪定各昇法座亦於八萬四千劫爲四部  
 7 衆廣說分別妙法華經一一皆度六百萬億  
 8 那由他恒河沙等衆生示教利喜令發阿耨  
 9 多羅三藐三菩提心大通智勝佛過八萬四  
 10 千劫已從三昧起往詣法座安詳而坐普告

大衆是十六菩薩沙彌甚爲希有諸根通利  
 智慧明了已曾供養無量千萬億數諸佛於  
 諸佛所常修梵行受持佛智開示衆生令人  
 其中汝等皆當數數親近而供養之所以者

1 何若聲聞辟支佛及諸菩薩能信是十六菩  
 2 薩所說經法受持不毀者是人皆當得阿耨  
 3 多羅三藐三菩提如來之慧佛告諸比丘是  
 4 十六菩薩常樂說是妙法蓮華經一一菩薩  
 5 所化六百萬億那由他恒河沙等衆生世世  
 6 所生與菩薩俱從其聞法悉皆信解以此因  
 7 緣得值四百萬億諸佛世尊于今不盡諸比  
 8 丘我今語汝彼佛弟子十六沙彌今皆得阿  
 9 耨多羅三藐三菩提於十方國土現在說法  
 10 有無量百千萬億菩薩聲聞以爲眷屬其二

このように、破片ナがオモテ面からウラ面へと続く途中で欠損している  
 経文(四行分)を、破片ニが補っていた様子が見て取れる。したがって、

個体としてはそれぞれ別のものであるが、経文の並びでは個体Pのオモテ  
 面からウラ面にかけて脱漏した部分を個体Pに書写し、これをあわせるこ  
 とで經典上の整合をとっているものとみなせる。

こうした補欠を目的とした片面瓦経の実例は、少なくとも三重県小町塚  
 瓦経の検討においても確認されている〔加藤二〇一七、四五〜四六頁〕。そ  
 こでは一二行の脱漏を補うために片面のみに刻字された粘土板が製作され  
 ていた。おそらく今熊野亀塚瓦経においても同じような脱漏分の補完個体  
 が作られ、それが復原個体P'だったとみてよいだろう。

山根瓦経として現存する破片ニは、幅六三mm、高さ一一二mm、厚さは  
 一五mmを測る。焼成は軟質で、淡黄褐色を呈するが、一部に暗灰色を帯び  
 た部位もある。白色の砂粒を含み、摩滅した様子を看取できる。

罫線は両破片ともに確認できるが、破片ニは刻字のある面のみ施され  
 ている。匡郭線は、破片ナは欠損しているために不明だが、破片ニでは刻  
 字面天側に確認できる。

〔二七〕復原個体Q (第18図)

破片ヌを含む個体として復原される。拓本から破片形状を推測すること  
 が難しいが、片方の袖側が直線なことから小口面が残存していると判断  
 した。「泉涌寺南谷出土 丹羽氏蔵」との注記が拓本に残る。両面ともに  
 罫線を有し、その幅は一九mmから二〇mmを測る。刻字は比較的明瞭である。  
 文字の判読結果を次に示す。

《X面》

..... 若□□□.....  
 ..... □大歡喜□.....

《Y面》

..... 非實我.....



7 言寶處在近此城非實我化作耳爾時世尊  
 8 欲重宣此義而說偈言  
 9 大通智勝佛 十劫坐道場 佛法不現前 不得成佛道  
 10 諸天神龍王 阿修羅衆等 常雨於天華 以供養彼佛

一七字詰で片面一〇行という通有の配置案で復原した。小片のためかなり確度は低い、文字の並びに大きな矛盾はなかった。当復原案に則って割り付けていった場合、当個体は二五枚目ないし二六枚目に相当する。

(一八) 復原個体 R (第19図)

破片ネから得られた拓本のみが現存する復原個体である。拓影上での形状が大きく異なるため、もしかすると別々の破片かもしれないが、ひとまず並べて所載されていた状況をふまえて、同一破片の表裏と判断した。その判読結果を示しておく。

《X面》

多  
 及天  
 華経無有

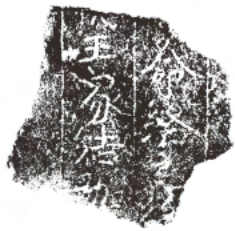
《Y面》

須  
 為  
 須

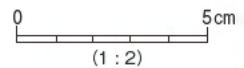
この内容を大正大藏経と校合したところ、法華経卷五「提婆達多品第十二」に含まれる内容に相当し、X面がオモテ面となると考えられる。残存する行数が各面ともに二行程度しかないため、ひとまず通有の配置案を採用して復原をする。

10	即便隨仙人	供給於所須	採薪及菓麻	隨時恭敬與
9	若能修行者	吾當爲汝說	時王聞仙言	心生大喜悅
8	時有阿私仙	來白於大王	我有微妙法	世間所希有
7	搥鍾告四方	誰有大法者	若爲我解說	身當爲奴僕
6	我念過去劫	爲求大法故	雖作世國王	不貪五欲樂
5	義而說偈言			
4	故精勤給侍令無所乏爾時世尊欲重宣此			
3	床座身心無倦于時奉事經於千歲爲於法			
2	給所須採菓汲水拾薪設食乃至以身而爲			
1	當爲宣說王聞仙言歡喜踊躍即隨仙人供			
10	來白王言我有大乘名妙法華經若不違我			
9	我說大乘者吾當終身供給走使時有仙人			
8	國位委政太子擊鼓宣令四方求法誰能爲			
7	惜軀命時世人民壽命無量爲於法故捐捨			
6	國城妻子奴婢僕從頭目髓腦身肉手足不			
5	足六波羅蜜勤行布施心無憍惜象馬七珍			
4	國王發願求於無上菩提心不退轉爲欲滿			
3	量劫中求法華經無有懈倦於多劫中常作			
2	爾時佛告諸菩薩及天人四衆吾於過去無			
1	妙法蓮華經提婆達多品第十二			

この結果、粘土板表裏の冒頭・末尾をかるうじて含んでいるとみられる。なお、拓影上の文字の横位と經典上のそれとがうまく合致しないため、錯簡の可能性が残る。両面とも罫線が引かれており、その幅は一九mmと



第20図 復原個体S



第19図 復原個体R

二〇mmである。

(一九) 復原個体S (第20図)

破片ノを含む個体として復原される。現在のところ片面の拓影が残るのみで復原個体とはいいがたいが、ひとまず報告しておく。判読できた文字は以下のとおりである。

.....  
..... 命終 □ .....  
..... □ 王家結 □ .....  
.....

これを大正大藏經と校合したところ、法華經卷七「藥王菩薩本事品第二十三」に含まれる内容に相当すると考えられた。罫線が引かれており、その幅は一九mmであった。なお、残存文字が片面のみであるため、配置案の提示は行わないこととした。

(二〇) 復原個体T (第21図・写真2)

破片ハ・ヒ・フから復原された個体である。破片ハは拓本のみが残っており、破片ヒとフは山根瓦経として現存する<sup>(4)</sup>。破片ハが両袖と地側の小口を有し、破片ヒ・フは接合のうえ天側と片袖の小口を有していることから、原形法量をほぼ把握できる。その結果、高さ二四六mm、幅一九三mm、厚さが一六〜一七mmとなった。

破片ヒ・フの胎土は比較的堅緻で、焼成も軟質だが良好である。片面には暗灰色に変色している箇所があるが、おおむね淡茶褐色〜黄褐色を呈する。両破片を接合した状態での法量(最大値)は、高さ一三三mm、幅七七mm、厚さ一六mmを測る。

この三破片をまとめて判読したものが以下である。

《X面》

..... 械枷□□□其  
 ..... □□□得解□  
 ..... □□□主將□  
 ..... 其中一人□□□  
 ..... □應□□□□  
 ..... □以無□施(後方)□□□  
 ..... □當得解脫衆□人  
 □ ..... □  
 聞俱發□□□无觀□音菩□□其□□即  
 得解脫無盡□觀(後方)□音菩□□□□  
 神之力巍巍□是 (空白)

《Y面》

若有衆生多於□欲□念恭敬觀世音菩薩  
 便得離欲若多瞋恚常念恭敬觀世音菩薩  
 便得離□□□愚癡□念恭敬觀世音菩薩  
 □ ..... □音菩薩有如是等大  
 ..... □生常應心念  
 ..... □養觀世音菩薩  
 ..... □女便生端正有  
 ..... □無盡意觀世音  
 ..... 恭敬禮拜觀世音  
 ..... □應受持觀世音

これを大正大藏経と校合したところ、法華経卷八「観世音菩薩普門品第二十五」に含まれる内容と合致した。この結果、各破片ともにX面がオモ

テ面となることがわかった。一行当たりの字数は一七字を基本としつつ、一部では一五字で改行される。また行数は片面一〇行とみてよいだろう。以下、その配置をまとめて復原案として示す。

1	設復有人若有罪若无罪	械枷鎖繫其
2	身稱觀世音菩薩名者皆悉	斷壞即得解脫
3	若三千大千國土滿中怨賊	有一商主將諸
4	商人齎持重寶經過嶮路	其中一人作是唱
5	言諸善男子勿得恐怖汝	等應當一心稱觀
6	世音菩薩名號是菩薩	能以無畏施於衆生
7	汝等若稱名者於此怨賊	當得解脫衆商人
8	聞俱發聲言南無觀世音菩薩	稱其名故即
9	得解脫無盡意觀世音菩薩	摩訶薩威
10	神之力巍巍如是	
1	若有衆生多於	淫欲常念恭敬觀世音菩薩
2	便得離欲若多瞋恚常念恭敬觀世音菩薩	
3	便得離	瞋若多愚癡常念恭敬觀世音菩薩
4	便得離癡無盡意觀世音菩薩	有如是等大
5	威神力多所饒益是故	衆生常應心念
6	若有女人設欲求男禮拜	供養觀世音菩薩
7	便生福德智慧之男設欲求女	便生端正有
8	相之女宿殖德本衆人愛敬	無盡意觀世音
9	菩薩有如是力若有衆生恭敬禮拜觀世音	
10	菩薩福不唐捐是故衆生	皆應受持觀世音



オモテ面三行目の末尾において、拓本の上では「将」の後に二文字程度の高さで文字らしき痕跡が見取れたが、経文校合の結果からは一文字が充てられることとなった。また、ウラ面の後半数行においても行末部分に空白が存在すると判読されており、配置案との比較では文字の横位でずれが生じている箇所も確認できる。欠損している部分に錯簡が生じていた可能性は考慮しておくべきだろう。

なお、破片ハの地側小口から採られたと推察される拓本には丁付らしきものが認められた。校合結果を勘案すると「八卷 二」と判読でき、さらに計算から求めた枚次の上でも巻八の二枚目に相当することから、丁付と理解し、当判読内容を採用しておく。

#### 四. おわりに — 山根資料のまとめと既存資料の比較

以上、前後編にわたって山根徳太郎により収集された今熊野亀塚瓦経関係資料について紹介するとともに、そこに書写された経典の同定と個体の復原を試みてきた。その結果、山根が所蔵していた資料は合計二一枚分に相当すると推察された。あらためてその内容を第3表として提示する。

今熊野亀塚瓦経とされる資料については、中村直勝の報告をはじめとして、いくつかの紹介と復原的研究が行われてきた。最後に、これら既知の資料と山根瓦経資料との比較を行い、両者の異同について確認しておきたい。

##### ① 書写経典と構成

現在までのところ、既知の資料において確認できる経典はすべて法華経であり、山根資料においてもその範疇に収まるものであった。また、所載

された経典は巻一の「序品第一」から始まり、巻八「妙莊嚴王本事品第二十七」までの法華経全体を確認できる<sup>(3)</sup>。このことから、今熊野亀塚瓦経は法華経八巻分のみで構成されていた可能性が高いといえるだろう。

##### ② 粘土板の法量について

難波田徹によって紹介された個人所蔵の完形品があり「難波田一九八〇、八頁」、その法量は高さ二五二mm、幅一九八mm、厚さ二二mmを測るといふ。この計測箇所を捕捉できる個体をほかに求めたとき、東博所蔵B一二一七八一と山根拓本からなる個体J、同じく東博所蔵B一二一七八一からなる個体K、そして山根拓本から復原された個体Tがあげられる。これらと完形個体を比較すると高さで約一〇mmほどの違いが認められるが、幅はほぼ同じ値を示しており、一連の製作物とみなすことはほぼ首肯されよう。

また、粘土板の厚みについては、山根資料の平均値が一七mmとなり、最小値は東京国立博物館所蔵B一二一七八一三の一三mmであった。個人蔵完形品の厚さ二二mmと比較すると、最大で一〇mmの差となる。厚さの差としては看過しがたいが、興味深いことに、山根資料の現存破片においても同じく二二mmの個体が存在していること、そしてこの厚手の数値を示すものがいずれも序品第一に該当する個体であるという共通点があげられる。ここでは粘土板の切り離し幅に修正が加えられた痕跡であるとみなしておきたい。

##### ③ 文字数と行数

文字数は、経文部分では一行一七文字、偈文では一六字ないし二〇字を基本とする。一面当たりの行数については、九行と一〇行が混在するが、一〇行を行取りの基本としてみるとみなせる。同時に、九行で割り付けら

第3表 復原個体の属性比較

復原個体	検査	計算上の枚数	法量 (高×幅×厚)	表裏										丁付	備考
				オモテ ウラ	天奈白	地奈白	右奈白	左奈白	行間	1行字数	行数				
A	法華経 第一巻	序品第一	-	オモテ ウラ	-	11	0	-	-	19~20	17	9			
B	法華経 第一巻	序品第一	- × (195) × 22	オモテ ウラ	-	10	0	0	0	19~20	17	10			
C	法華経 第一巻	方便品第二	-	オモテ ウラ	-	7~8	0	-	0	19~23	15~17	10			
D	法華経 第一巻	方便品第二	- × - × 16	オモテ ウラ	-	-	0	-	4	19~20	17	10			
E	法華経 第一巻	方便品第二	-	オモテ ウラ	-	-	0	-	0	18~20	20	10			
F	法華経 第一巻	方便品第二	-	オモテ ウラ	-	6	0	0	0	17~20	20	10			
G	法華経 第二巻	方便品第三	-	オモテ ウラ	9	-	0	-	-	18~20	17、20	10			
H	法華経 第二巻	方便品第三	- × 198 × 12	オモテ ウラ	8	-	4	0	0	17~20	17	10			
I	法華経 第二巻	方便品第三	- × (200) × -	オモテ ウラ	9	-	-	0	0	19	16	10		19字分1行の配置をとる	
J	法華経 第二巻	方便品第三	244 × 198 × 17	オモテ ウラ	0	0	0	0	0	0	16	10	「廿」	丁付位置はオモテ面右小口か	
K	法華経 第二巻	信解品第四	241 × 196 × 18	オモテ ウラ	6~7	6	0	0	0	20	17	10			
L	法華経 第二巻	信解品第四	-	オモテ ウラ	6~7	6	0	0	0	20	17	10			
M	法華経 第三巻	授記品第六	- × 192 × 16	オモテ ウラ	0	7~8	7~10	0	0	19~21	17、20	9	「三卷」または「三六」	丁付位置はオモテ面左小口か	
N	法華経 第三巻	化城喻品第七	-	オモテ ウラ	-	3~4	0	0	0	17~20	17、20	10か			
O	法華経 第三巻	化城喻品第七	-	オモテ ウラ	-	4~8	0	0	0	20~23	17	10か			
P	法華経 第三巻	化城喻品第七	-	オモテ ウラ	-	7~8	0	-	5	19	17、20	10			
P	法華経 第三巻	化城喻品第七	-	オモテ ウラ	-	7~9	-	-	5	20	17、20	10		4行分脱漏	
P	法華経 第三巻	化城喻品第七	-	オモテ ウラ	-	-	-	-	-	あり	17か	10か			
P	法華経 第三巻	化城喻品第七	*補遺分	オモテ ウラ	5	-	0	-	-	20	17か	4か		ウラ面空白	
Q	法華経 第三巻	化城喻品第七	-	オモテ ウラ	0	-	0	0	0	0	0	0			
R	法華経 第五巻	提婆達多品第十二	-	オモテ ウラ	-	-	-	-	0	19~20	17、20	10			
R	法華経 第五巻	提婆達多品第十二	-	オモテ ウラ	-	-	-	-	-	19	17か	10か			
S	法華経 第七巻	薬王菩薩本事品第二十三	-	オモテ ウラ	-	-	-	-	-	20	17、20か	10か			
S	法華経 第七巻	薬王菩薩本事品第二十三	-	オモテ ウラ	-	-	-	-	-	19	不明	不明		拓本なし	
T	法華経 第八巻	觀世音菩薩普門品第二十五	246 × 193 × 17	オモテ ウラ	7	7~9	0	0	0	18~20	15~17	10	「八卷 二」	丁付位置は地側小口か	

【第3表 凡例】  
 ・「現存破片」欄で( )をつけたものは、実物を確認できない破片の拓本が存在することを示す。  
 ・「法量」は、実物があるものは実物から、それ以外は拓本から採寸し、互換の復原に効果があるもの(または復原の蓋然性が高そうなもの)のみを記載した。なお、( )は復原値を示す。  
 ・空白欄の「-」はその部位が欠損しているものを意味する。

れた例(復原個体A、B)がやはり序品第一を所載する個体であったことは興味深い。また、巻一の一枚目(序品第一の冒頭)とみられる個人所蔵完形品では、両面とも一〇行の行取りがなされているものの、オモテ面での筆写は八行にとどまっている「難波田前掲書」。上述の厚さの問題とも関連して、序品第一の部分のみにこうした揺らぎが存在したのか、あるいは別の箇所でも特徴的に確認できるのか、その検討は今後の課題としてい。

#### ④ 丁付について

今熊野亀塚瓦経の既知の資料において丁付が明らかなのは、中村報告資料(七)の「下側面」に残されていた「四二」が唯一であった「中村一九二六、七四頁」。しかし、残念ながらその破片も今日所在が分からなくなっているため、実態は不明である。したがって、山根資料に三点の丁付が確認できたことは、今熊野亀塚瓦経の理解において有益な情報をもたらしたといえる。そこで、丁付が施される場所の法則性が気になるところだが、今回の山根資料ではその位置が確実視できた部位はそれぞれオモテ面左辺と下辺の小口面という異なる部位であった(個体M・T)。今熊野亀塚瓦経における丁付の確認例が少ないため確かなことは言えないが、今のところ法則性らしきものをみてとることはできない。

#### ⑤ 片面瓦経について

今熊野亀塚瓦経においても、書写の際に生じた広範な脱漏を補完する目的で、片面瓦経が製作されていたことがわかった。今回確認された個体Pでは、四行分のみ書写されていたことが裏面への文字のつながりから明らかであり、かなりの空白を有していたことが想像できる。もしこれらの個体が破断した際には、表裏とも空白になる破片が生じる可能性が高

い。現存する両面空白の瓦経片、例えば東博瓦経B一二七八―四「加藤二〇一七」などは、これら補完瓦経の破片なのではないだろうか。こうした検討には拓本など二次元の情報では限界がある。よって今後の瓦経研究においては、経文の有無にかかわらずに、各機関に分散している破片資料の三次元形状データを取得し個体復原を行っていくことが望ましい。

山根資料の存在は、今までその存在が知られつつも資料の少なさから等閑視されてきた今熊野亀塚瓦経について多くの知見をもたらすものであった。同時に、山根徳太郎という研究者の見識を再確認させることにもつながったといつてよいだろう。今後は、破片形状全体を用いた復原や、文字の状態や使用されている字体などについても着目しながら、他機関で所蔵される今熊野亀塚瓦経関係資料についての情報を集めていく必要がある。

#### 〔後記〕

前編脱稿後に個体の計測値や旧所蔵者の注記について誤りを見つけた。多くは第2表内の数値であったため、後編所載の第3表はそれらを訂正している旨をお断りしておきたい。それ以外の訂正については以下のとおりである。読者諸氏には読みにくくなってしまうことをお詫びする次第である。

①三〇頁 第二表 復原個体Sの実物旧所蔵者欄

〈誤〉「丹羽氏」↓〈正〉「不明」

②三三頁 本文 下段三行目

〈誤〉「一四〇一五mm」↓〈正〉「二〇〇二二mm」

【註】

- (1) 以下、実物破片以外の計測は前編同様にすべて拓本で行った。
- (2) 判読内容の翻刻と、復原案の表記典拠および規則については、前編と同様である。また、判読内容の対校資料も前編同様にSAT大正新脩大藏經テキストデータベース 二〇一二版 (<http://2idzku-tokyo.ac.jp/SAT/>) を主に用い、あわせて文字の異同や補注を「高楠一九八九」により確認した。
- (3) 当瓦経における欠損部分（オモテ面前半とウラ面後半）は、福岡県飯盛山瓦経と平家納経の配字を比較対校した「八尋一九八二」をもとに復原したものである。
- (4) 破片ヒとフの接合面からは出土後に破断した様子が看取れるが、採取されていた拓本（「山根蔵」の注記あり）にも破断した線が確認できるので、採拓時にはすでに破断していたらしい。山根が破片を入手し拓本を採るまでの間に割れてしまったのだろう。
- (5) 先行研究「難波田一九八〇、網干一九八二」の成果に加えて、京都大学所蔵資料、黒川古文化研究所所蔵資料などの実見内容を含む。

【参考文献】

- 網干善教 一九八二「京都今熊野亀塚瓦経出土の瓦経について」『日本宗教社会史論叢』
- 水野恭一郎先生頌寿記念、国書刊行会、一一三～一二五頁。
- 加藤俊吾 二〇一七「東京国立博物館所蔵今熊野亀塚瓦経と山根徳太郎旧蔵拓本」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第六七一号 東京国立博物館、七～二四頁
- 二〇二〇「大阪歴史博物館所蔵の今熊野亀塚瓦経関係資料―山根徳太郎旧蔵の拓本と瓦経片―（前編）」『研究紀要』第一八号、大阪歴史博物館、二七～五四頁
- 高楠順次郎 一九八九『大正新脩大藏經』第九卷法華部全・華嚴部上（普及版）大正新脩大藏經刊行会
- 中村直勝 一九二六「今熊野亀塚瓦経」『京都府史蹟勝地調査會報告』第七冊、京都府、七～七九頁。
- 難波田 徹 一九八〇「京都国立博物館蔵瓦経片の復原的研究」『MUSEUM（東京国立博物館美術誌）』No.三五二、東京国立博物館、四～二二頁
- 八尋和泉 一九八二「筑前飯盛山瓦経（前編）」『九州歴史資料館 研究論集8』、三三～一六頁



右と同じ3次元データから  
サーフェス画像に調整を行ったもの

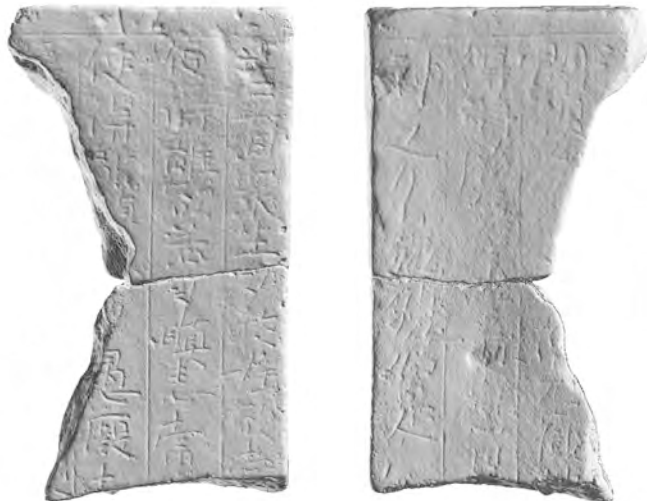
多視点画像計測 (SfM-MVS) によって生成した  
3次元モデルから作成した正射変換画像

写真1 山根瓦経 破片ニ（復原個体P'）

\*縮尺：1/2



二つの破片をもとに多視点画像計測（SfM-MVS）によって生成した3次元モデルから作成した正射変換画像



上掲写真と同じ3次元データから生成したサーフェス画像に調整を行ったもの

写真2 山根瓦経 破片ヒ・フ（復原個体T）

\*縮尺：1/2